

人気ドラマの話しことばにみる性差

—TVドラマ「ビューティフルライフ」の文字化資料から—

遠藤 織枝

1. はじめに

TVドラマ、「ビューティフルライフ」（北川悦吏子原作）は、2000年1月16日から3月26日まで、毎週日曜日の夜9時から10時までの1時間、11回にわたり、TBSから放送された。『毎日新聞』（2000年4月1日）によれば、「売れっ子の美容師・柊二（木村拓哉）と車椅子の図書館司書・杏子（常盤貴子）が出会い、お互いの気持ちを探りながらも恋心を深めていく。共に生涯の伴侶と決めたとき、女は難病のため27歳で逝ってしまう」という物語で、11回の平均視聴率32.3%で、1990年以降の民放の連続ドラマとしては最高、最終回には41.3%という高い視聴率を記録した。

また、NHK放送文化研究所の調査によると、2000年3月6日から1週間の間に見た番組の第1位に上がっている。（『放送研究と調査』日本放送出版協会 7月号、p.5）

このドラマがそれほど高い視聴率で迎えられた理由を『毎日新聞』は次のように分析した。「キムタクだから」「2人の会話が自然でさわやか」「青山、表参道という人気スポットが舞台」「ひねくったドラマが多かった中で、シンプルなラブストーリーが受けた」「日曜日夜9時の家族で見る時間帯」などと。

ここで、このドラマを話しことば資料として選んだ理由は、2番目に挙げられた「2人の会話が自然でさわやか」に触発されてのものである。自然なさわやかな話しことばといわれるものはいったい、どんな話しことばか—。

ドラマであるから、作者が作り出したフィクションであって、自然談話ではない。フィクションであることは絶対に動かせない事実であるが、「自然な話しことば」として、多くの視聴者に受け入れられたのも動かせない事実である。このことは、作者の作った人物の話しことばが、作者にとって好ましい

もの、あるいは、理想的とされたものであっただろうし、また、視聴者にとっても、受け入れやすいものであったからに違いない。したがって、本稿では、現実の話しことばとしてではなく、フィクションのことばを通じて、その理想像を知り、その受容を通じて、現代の日本人の言語観を知ろうとするものである。

主な登場人物は、以下の通りである。

沖島 終二：医学部の受験をめざして予備校に通ったこともあるが、現在は東京青山の美容室「ホットリップ」の花形美容師として、人気を集めている。

町田 杏子：難病で車椅子生活だが、公立図書館の職員として、自分で車を運転して通勤している。通勤途中に、車線をはみだして走っていて、後ろから来たバイク通勤の沖島から嫌みをいわれた。その沖島が本を探しに杏子のいる図書館にきて、再会するところから2人は親しくなる。

町田 正夫：杏子の兄。妹を親身に保護しようとして、そのためには外で就職しない方がいいと考え、親の営む下町の町田酒店を継ぐことにした。下町の、古風なまでに妹を守る男性として描かれる。杏子の図書館の同僚サチと結婚する。

サ　チ：杏子の親友。町田正夫がことばで「お前」と呼ぶことを男尊女卑だといって批判するが、結局は正夫と結婚する。

さつき：終二の予備校時代の級友。医者になったが、結婚して両立できず、医者をやめて画廊でアルバイトしている。夫の浮気がわかって離婚を決意する。

その他：杏子の両親、杏子の障害を気遣うボランティア、終二の同僚のサトル、後輩のタクミなど。

2. 分析の方法

まず、北川悦吏子作『ビューティフルライフ』（角川書店、2000）と台本を基に、ビデオの「ビューティフルライフ」で実際に話されたことばと照合

しながら文字化資料を作る。台本には登場人物の話すはずのことばが書かれているのだが、ビデオと比べてみると、ずいぶん台本とは違った談話になっている。それだけ、出演者たちの生のことばに変えられているということである。

この文字化資料に、その話者、相手、関係、場面、人物の性別、年代など談話に関する情報を添えて、電子媒体にデータとして入力する。なお、今回作成したデータは、ドラマの話者たちの互いの関係が固定した段階での談話を資料にするため、後半の第7回から11回までに放送されたものを用いている。

こうして作成した電子データを基に、必要事項を検索して、このドラマの人物たちの談話の中の人物の呼び方、場面ごとの男女の話し方、女性の積極的な発話、の3点に絞って分析したものを報告する。

3. 人の呼び方

このドラマでは、対称詞としては、「あなた・あんた・おまえ」があるが、名前を呼ぶのが量としては多い。「柊二・杏子・サッチャン」のようなものである。

これを、異性間と同性間に分けて表にして示す。なお、「杏子→柊二（407発話）」というのは、杏子の柊二に向けての発話が407あることを示している。

3.1 相手の呼び方〔異性間〕

	杏子→柊二（407発話）	柊二→杏子（385発話）
あなた	3	1
あんた	0	8
お前さん	0	1
お前	0	12
名前のみ	〈柊二〉 49	〈杏子〉 9
計	52	31

	さつき→柊二(104発話)	柊二→さつき (97発話)
名前一部+ちゃん	〈柊ちゃん〉 16	0
計	16	0

	サチ→正夫 (55発話)	正夫→サチ (63発話)
お前	0	1
名前+さん	〈正夫さん〉 6	0
名前一部+ちゃん	0	〈サッチちゃん〉 11
計	6	12

3.2 相手の呼び方 [同性間・男性]

	柊二→サトル (24発話)	サトル→柊二 (33発話)
あんた	2	0
お前	1	2
名前のみ	0	〈柊二〉 4
計	3	6

	柊二→タクミ (77発話)	タクミ→柊二 (70発話)
お前	16	0
名前+さん	0	〈柊二さん〉 25
計	16	25

3.3 相手の呼び方 [同性間・女性]

	杏子→サチ (40発話)	サチ→杏子 (46発話)
あんた	1	0
名前のみ	0	〈杏子〉 8
計	1	8

異性間で、杏子が柊二を呼ぶ語は「柊二」と呼び捨てにするものが圧倒的に多い。柊二が杏子を呼ぶ語としては「お前」が最も多いが、「あんた」「杏子」もかなり使われている。

さつき⇄柊二では、さつきが「柊ちゃん」と親しみをこめて呼ぶのに対して、柊二からのさつきを呼ぶことばはない。対称詞を使わないことも、相手

に対する一つの立場の表明で、ここでは少し距離が感じられる。

サチ⇔正夫では、サチが「正夫さん」、正夫が「サッチャン」とはっきり呼び分けられている。

この3組の異性間の呼び方で、杏子の「柊二」の多さが目立つ。「柊二さん、柊ちゃん」といわず、呼び捨てにしているところに、杏子のことばの強さが表われている。

同性間では、柊二⇔タクミの「お前」「柊二さん」の差が著しいが、男性間の先輩・後輩の関係を明らかに示している。

4. 場面ごとの男女の談話

性差を研究したものは、現代日本語研究会、遠藤・尾崎・高崎など多いが、それらは、個々の文末語や呼びかけ語などについて、性別にどのようなものが多いか少ないかを調べ、それによって性差の有無をみたものであった。ここでは、個々の話者の用語の多少をみるのではなく、いくつかの場面単位での男女の談話を見ようとしている。従来の個々の話者の談話を分析したものは、相手や場面との関係性がわからず、単に語の多少だけを問題にすることしかできなかったが、ここでは、同じ場面で男女がどう話し合っているかを、まとまりとして捉え、より有機的に男女の話し言葉を把握したいと考えた。

4.1 杏子⇔柊二

場面Aは、第8話で、柊二に黙って親戚の家に行ってしまった杏子を追いかけてきた柊二と杏子が、海の見える高台で話し合う場面である。以前の柊二の恋人のことが話題になっている。

ここでの二人の談話で、差が出ているのは、柊二が「おれ」という自称詞と、二人称詞「あんた」を使うのに対して、杏子はそのような人称詞を使わないことである。一方、文末では「でしょ」を互いに1回ずつ使い、言いさを3回ずつしているなど、話し方としては、極めて近い話し方と言える。

場面Bは、第8話の杏子が柊二のマンションに来ていて、干物を焼いているところに柊二が帰ってくる場面である。会ったときに、互いに「よっ」と

		杏子→終二 (11発話)		終二→杏子 (12発話)		
場面A	文	基本形のみ	例：会いに行った	2	例：少し動いた	4
		でしょ↓	嫌いじゃないでしょ	1	すぐ見抜くでしょ	1
		だね	正直だね	1	—	0
		よ↓	いいと思うよ	2	電話してよ	1
		の↓	つもりだったの	1	—	0
		かな↓	いい人なんじゃないかな	1	—	0
	人物呼称	言いさし	合わせる顔なくて	3	感じだし	3
		おれ	—	0	—	3
		あんた	—	0	—	2
		杏子	—	0	—	2
		終二	—	1	—	0
		あの人	—	1	—	0
あいさつ語	あいつ	—	0	—	1	
	ごめん	—	0	—	1	

		杏子→終二 (35発話)		終二→杏子 (46発話)		
場面B	文	名詞止め	—	3	—	4
		基本形のみ	来たんだ	8	きいた	6
		だよ	むりだよ	2	—	0
		でしょ↑	—	1	—	0
		の	冗談言ってるの(の↑)2/いいの(の↓)5	7	やんないの (の↓)2	2
		かな↓	—	0	ビールかな	3
		たっけ	—	0	あったっけ	1
		よ	入れないよ(よ↓)2	2	入れるよ(よ↑)1/考えたよ(よ↓)3	4
		わ↓	—	0	うまいわ	1
		ね↓	かくしてたね	1	うまいね	1
	人物呼称	言いさし	おいしいんだから	3	ないんだけど	5
		か↓	—	0	言ったんじゃないか	1
		あたし	—	1	—	0
		わたし	—	2	—	0
		おれ	—	0	—	6
		あなた	—	2	—	0
		あんた	—	0	—	4
		杏子	—	0	〈杏子〉	4
あいさつ語・応答詞	うん	—	2	—	2	
	よっ	—	1	—	1	
	ごめん	—	1	—	0	

		杏子→終二 (29発話)		終二→杏子 (33発話)		
場面C	文	名詞止め	—	2	—	2
		基本形のみ	いるんだ	5	—	1
		でしょ↑	—	0	おばちゃんでしょ	2
		の	いいの(の↑)2/来るの(の↓)5	7	だれもってったの(の↓)	3
		かな↓	いくつくらいの時かな	2	内緒だったりするのかな	1
		な	だれだったっけな	1	いいな	2
		か↓	おばちゃんか	1	借りよか	1
		よ↓	—	0	いるよ	1
		言いさし	ショーとかしちやったり	3	剃ってもらえるし	5
		じゃない↓	飾ってあるじゃない	1	当然じゃない	1
	人物呼称	終二	〈終二〉	3	あなた	1
		あたし	—	1	—	0
		わたし	—	2	—	0
		おれ	—	0	—	1
応答詞		うん	—	3	—	4
	ああ	—	0	—	1	

言い、応答詞の「うん」も2回ずつ使っているなど、ふたりの用語や話し方に差があまりみられない。

場面Cは、第9話の終二のマンションで、子どものころの思い出話をし、将来二人で美容室をもつ夢を語り合う場面である。終助詞の使い方、「うん」の使う頻度など、極めて似ている。

以上、場面A、B、Cの杏子⇄終二の発話で明確な性差が表われているのは、自称詞で終二の「おれ」と杏子の「わたし／あたし」だけである。感動詞・応答詞ではほとんど差はない。文末の語句も杏子は従来の女性専用語とされるものを一切使っていないし、終二も男性専用とされる語は使っていない。

4.2 さつき⇄終二

場面		さつき→終二 (9発話)		終二→さつき (11発話)	
場面D	文	名詞止め	—	0	1
		基本形のみ	～されちゃうかと思った	1	1
		の↓	どうしたの	1	1
		でしょ↓	—	0	1
		さ	—	0	1
	応答詞・あいさつ語	言いさし	帰ってきたから	1	1
		もしもし	—	2	0
		あ	—	4	4
		いや	—	0	2
		ごめん	—	1	0
		ごめんね	—	1	0

場面Dは第7話で、先に、突然たずねてきたさつきのことが気になって、夜、マンションにもどった終二がさつきに電話している場面である。

「でした」「でしょ」など丁寧の助動詞の使用は、さつきが0例なのに対して終二は4例、つまり丁寧語の使用では終二のほうが多くなっている。これは、呼称でも触れたが、さつきが以前の関係を取り戻したいと考えるのに対して、終二は、距離をおきたいと考えているので、丁寧語の使用が増えているのである。

4.3 杏子⇄サチ

場面			杏子→サチ (11発話)		サチ→杏子 (12発話)	
	文	名詞				
		基本形のみ	検査する	2	ヤバイ	1
E	末	でしょ↓	んなわけないでしょ	1	—	0
		だよ	—	0	2人目だよ	1
		かな↓	—	0	ダメなのかな	3
		よ↓	きいてないよ	3	未婚の母よ	1
		の↑	—	0	きいてなかったの	1
		かよ↑	—	—	未婚の母かよ	1
		言いさし	大丈夫だって	2	先生と	1
		—	—	—	—	—
E	人物呼称	あたし	—	2	—	1
		わたし	—	0	—	1
		サチ	〈サチ〉	3	—	—
		正夫さん	—	0	—	1
		兄貴	—	2	—	0
	応答詞・あいさつ語	うん	—	0	—	2
		えっ	—	2	—	1
		あれ	—	0	—	1
		いや	—	0	—	1
		ありがとう	—	0	—	1
		おめでとう	—	1	—	0

場面Eは第10話で、同性間の談話の例で、サチが杏子に子どもができたことを知らせる場面である。杏子⇄サチの談話での杏子の発話は、対終二、のものほとんど変わらない。

以上、場面ごとに、異性間、同性間の談話で、性差をみようとしたが、人称詞以外での明らかに差があると思われる用語・用法は見当たらなかった。

5. 女性の積極的な発話

このドラマでは、女性の発話が積極的で、それに男性がおされながら受けとめるという場面がいくつかある。その例を、杏子→終二、サチ→正夫、さつき→終二の三組の発話から示す（下線遠藤）。

5.1 杏子→終二

[a] 杏子：でもさ、なんかがあつて朝帰りならまだしも、なんもなく朝帰り
りってなんちゅうか、より悔しいよね。

柊二：わかったよ。

杏子：どうせうったらなかったら言われるのわかってんだから、だったら、
いつそのこと……。

柊二：わかったっての、もう、朝から、100回聞いてるよ、それ。

[b] 杏子：うん……（くすつと笑う）、ねえ、きょう、キスしなかったね。

柊二：何、いきなり。

杏子：今度するか、ブチューつと。

柊二：いちおうね、レディーなんだからさ、そういう言い方はね。

杏子：はい。

柊二：でもいいよ、ブチューて。

[c] 杏子：……スキンシップに弱いのかな、ああいうことあるとさ余計好き
になるよね。

柊二：……ちょっとまって、ちょっとまって、思ったことそのまま言っ
てるね。

5.2 サ チ

[d] サチ：……正夫さん。

正夫：はい。

サチ：それ、すっごくうれしいんだけど、うれしいし、よろこんでるん
だけど一つ、提案していい？！。

正夫：提案？……。

（中略）

サチ：フツーは、今日は帰りたくないのとか、ドラマなんかだと……。

正夫：ああ……。

（中略）

サチ：だってさ、順番逆でしょ！結婚するまで何にもないなんて変だよ、
明治時代じゃないんだからさ。

正夫：いい、いいの？寄っても。

5.3 さつき

[e] 柊 二：またさあ、泊まるとこなかったりしたらくりやいいじゃ、襲ったりしないから、ぜったい。

さつき：襲ってくれてもよかったんだけどな。

柊 二：……冗談きついよ、奥さんがね。

ここでは、用語・用法ではなく、談話の内容と談話のリードのしかたをみた。談話に盛られる内容の質や、それをリードする人物を知することは、談話運用の性差を知る手がかりとなり得ると考えるからである。主な登場人物(女性の)の男性との談話であるが、いずれも、女性のほうが恋愛感情を率直に表明し、男性は受身の立場に回っている。そのような設定と談話が受容されたことで、「自然でさわやかな会話」の内容を追認することもできた。

6. まとめ

以上みてきたとおり、このドラマには、女性一特に主人公杏子一のことばと発話内容両方でののはっきりとしたもの言いが目立っている。異性間の対話でも、その用語、表現はほとんど変わらない。若い男女の話しことばの性差が縮まっていることが確認できたと思う。また、発話内容でも、女性側から積極的に男性に働きかけ、男性がそれにおされて必死に受けとめている場面がいくつかみられた。このドラマでは女性たちは男性とほぼ同じことば遣いをし、男性よりずっと積極的な内容の発話で男性をリードしていた。こうした話しことばが「自然でさわやか」と評価され、好評をもって迎えられたわけで、ここに現代の日本人の言語観の一端をみることができると思う。

参考文献

遠藤織枝 (1994) 「会議中の応答詞一性差のみられない「うん」の使用一」(『職場における女性の話しことば』現代日本語研究会)

- 遠藤・尾崎（1998）「女性のことばの変遷—文末・コト・てよ・ダワを中心に—」（『日本語学』Vol. 17, 5、明治書院）
- 尾崎喜光（1994）「終助詞について—脱「女性専用語」使用の傾向」（『職場における女性の話しことば』現代日本語研究会）
- 尾崎喜光（1997）「女性専用の文末形式のいま」（『女性のことば・職場編』現代日本語研究会編、ひつじ書房）
- 尾崎喜光（2000）「話し言葉の用例探し」（『日本語学』Vol. 19, 5、明治書院）
- 小林美恵子（1997）「自称の獲得—高校生へのアンケート調査から—」（『ことば』18号、現代日本語研究会）
- 小林美恵子（1999）「自称・対称代名詞とその省略—映画『女人四十』にみる—」（『ことば』20号、現代日本語研究会）
- 高崎みどり（1996）「テレビと女性語」（『日本語学』Vol. 15, 9、明治書院）

付 記

1. 「ビューティフルライフ」の台本をお貸しくださったTBSディレクター植田博樹氏に厚くお礼申し上げます。
2. 本稿は、2000年8月24日、フィンランドのラハティ市で開かれた第8回ヨーロッパ日本学研究集会で発表したものに加筆訂正したものです。

（えんどう おりえ）